

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第236号

2021年12月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第1の手紙講解説教」より (6)

### 永遠の生命、永遠の富

パウロの目の前には、常に、永遠の生命、永遠の富という考えがぶら下がっています。従って、パウロのキリスト教は、現代我々が理解しているキリスト教とは違います。キリスト再臨の時、我々も栄化復活して、神の栄光を分与され、これを共有する事にあります。君達には、近き将来に、雄大な特権があるのに、現在、この世の小さい問題に対して裁く力がないのか、と言っているのです。実にパウロらしい責め方です。現代人の科学で固まった頭では、考えられないことではありますが、聖書の説くキリスト教は、いつもそういうものが根底となっています。有名な山上の垂訓「幸いなるかな心の貧しきもの…」の最後は、「喜び、喜べ、汝らの報いは、天において大いなり」という言葉で終わっています。イエスやパウロのキリスト教というものは、我々が現在理解するところのキリスト教とは非常に違うということを知る必要が有ります。我々の信仰生活が無力であるという根本原因について深く反省する必要があります。

があります。我々の信仰生活が無力であるという根本原因について深く反省する必要があります。ロマ書 8 章 18 節で、パウロは、「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」と言っています。この世の悲しみ、苦しみに対するキリスト教の解決法はこういうものです。我々は力の源を知りません。聖霊豊かに降りまして、我々もパウロと同じく、そういう力の源に真の清水を汲みたい。

## 佐藤武兄弟の召天

私が 25 年の伝道を開始した 1 年前から、千葉県志津の佐藤〔武〕兄弟のお家へ、毎月伺って集会を持っておりました。その佐藤兄弟が先月の 11 日から健康を害しまして、会社に出られないようになりました。21 日から入院致しましたが、病状が悪化し、昨日、天に召されました。45 歳でした。今年のクリスマスには、佐藤ご一家 4 人はこの場所に座っておりました。その時、ご家族から、長い間志津に来られて伝道されたおかげで、今、こうして出席できることを感謝すると言われたことを思い出します。今夜の通夜には、私と家内と佐生兄弟と 3 人で、教会を代表して出席する予定でおりますが、葬式には、金子長老と看病に当たった石館基兄も出席する予定です。私が司式を行うことになっております。伝教大師の言葉を思い出します。比叡山を開設されるときに、「一隅を照らす人が国の宝であり、自分は、そういう人物を養成するために比叡山を造る」と言われた。佐藤兄弟は、農家の出身でしたが、彼の生涯は実に、誠実と、勤勉と、親切をもって貫いたものでした。私は、一隅を照らすという人は、こういう人ではないかと思いました。私も、若い頃は、人に感化を与えて、大きなことを行なうことが好きでしたが、その考えは変わって来ました。この頃は、伝教大師が言われる通りに、「一隅を照らすような人」が恋しくなってきました。平凡な仕事、平凡な人物として、自分の持ち場の一隅を照らす人が恋しくなってきました。私は、佐藤兄弟の生涯を見て、日本の宝、日本民族の将

来を決定する人はこういう人であろうと思います。偉人にあらず、普通の人であっても、神を如何に信じ、如何に生活し、如何に生きるかによって、その人の生涯が決定されると私は信じます。

こういうわけで、私が召されずに佐藤兄弟が召されました。昨日佐藤〔れん〕夫人は、「私も夫が行く所に私も行ける事は誠に有難いことです。先生、有難うございました。」と言われた。佐藤兄弟にこのような天国の信仰が与えられ、私の 25 年間にわたる伝道生活が成功したと言ってもよいと思います。私は、これから安心して伝道が続けたいと思います。

## 不品行

あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。(コリント I 6・19, 20)

何故パウロは、ここでこのように、不品行についてこれほど強調したのか。それは、このような不品行を行なうことによって我々の身体に霊が住まなくなるためであります。霊がなければ、我々は、善を行なう力が無くなります。従って、これは罪の中でも、最大なる罪と言ってよいのであります。これで信仰を失います。信仰と絶縁します。それで、パウロは、「汝らは知らないのか。断じて、そうではない」と言っているのであります。淫行は、信仰の生死に関係した問題であります。キリスト教では、肉欲を罪悪とは見ておりません。従って、キリスト教は決して禁欲主義ではありません。それを適当に満たすことをもってよしとしております。

## 性欲の誘惑から逃れる方法

当時のギリシア、ローマでは、淫行は許されていました。従って、この時代にパウロが示したこの教えが、如何に人類に貢献したかを知ることができます。これは、キリスト教独特の教えです。この教えは、天国において、我々が復活するという信仰と結び付けたものであります。天国へ迎えられるという復活の信仰に結びつくとき、初めて、我々に何事にも打ち勝つところの力が出て来ます。性欲を克服する力はこれ以外に方法はありません。このほかは、逃げるほか手はありません。体は、逃げて、心は、復活を願う。これで、性欲の誘惑から免れることが出来ます。夫婦関係の場合は別です。一体となって天に迎えられる信仰が与えられます。

キリスト者の自由は、キリストの意思に従う自由です。具体的には、目の前に置かれた最も近い義務を果たすことがキリストの意志であるから、それに従うことです。肉体に打ち勝つ問題は、我々が天国へ行くという、復活論と離すべからざるものです。性欲に勝つのみならず、我々の義務を果たす力もここに掛かっています。天国へ行く望みは、イエス・キリストの贖いから来ます。自分の行ないによらず、自分の信仰によらず、イエスキリストの贖いがある故に、我々は罪赦されて、復活する者となると理解するところにあります。

## この世の苦しみ、悲しみに打ち勝つ力

私の説教はまずいですが、ここに集まって来られた方々は、どうか私の説教を真剣に聴いて頂きたい。私は、聖書の教えを取りついでいます。本当に聖書の真理が分かったならば、我々は、この世の悲しみ、苦しみに打ち勝つことができます。何時も勉強しておりますロマ書7章で、パウロは「自分は善をできない、悪いことばかりしている。この死の体から救ってくれるのは誰か」と言っています。そして「主イエス・キリストによって感謝する」と言っています。さらに8章に至りますと、「すべてに勝って余りあり」という凱歌に変わっています。他の書簡によれば「我に力を与える主イエスによって、すべてのことをなし得る」と言っている。我々、そういう力を頂きたい。私は、自分で自分の信仰がさっぱり進歩していないことを知り、まことに情けなく思っています。

## 結婚問題についてのパウロ書簡

本日の場所は、コリント教会の人々が、結婚問題についてパウロに尋ねた箇所であります。結婚問題につき、パウロの考え方を述べたものでなく、尋ねられたことについての説明であります。従って、この部分は議論の多いところです。ある神学者は、パウロの勧めに対して批判的でした。それは、欲情に打ち勝てない者が結婚をし、また、欲情に打ち勝てる者は結婚しなくてもよい、と言っているようにも聞こえますから。しかし、この場所は、結婚というものはどういうものかを説明した箇所ではありません。結婚については、別に、エペソ書（5章22-33節）に書いています。ですから、大事な問題については、唯一つの文章によって解釈せずに、その人の書いた全体の書簡からその文句を解釈する必要があります。

## 私の福音の要点

ただ、各自は、主から賜わった分に応じ、また神に召されたままの状態に従って歩むべきである。(コリント I 7.17)

私は、この高円寺東教会の皆様に対して、そんなに偉いことをして欲しいとは申しません。私の福音の要点は、自分に与えられたる場所、与えられたる仕事において、神の聖霊に励まされて、永遠不滅の生命を受けて、天国を目当てとして分相応に与えられた仕事に励むということであります。これは万人に対して可能なことです。学生は学生として、実業家は実業家として、政治家は政治家として、自分の与えられた場所において、与えられた仕事において、聖霊に満たされてやる。実に、外観は平凡ですが、それでよい。私は諸君に対して平凡なる生活を勧めます。

## そのままの形で神と共に歩め

この世で終わりであれば、人間はどんなことをするか分かりません。したいことをしたい。我々はしたいことをするのではなく、すべきことをするには、どうしても来世がなければなりません。したいことをしていれば、必ず他人に迷惑をかける結果となります。……私は、ここでは聖書の講解しかしません。その聖書の教えは、すべて復活にかかっています。我々は人生において、辛抱すること、己に克つこと、そういう力を養う必要があります。この頃学校では、このようなことを教えてくれません。好きなことをやれ、というような教育は非常に危険です。ですから人間は、宗教というものを学ぶ必要があります。

自分が奴隷であるとか、自分が学生であるとか、自分は会社員であるとか、政治家であるとか、牧師であるとか、そういう外側の形はもう問題ではありません。何でもよい。要は、そのままの形で、自分が神と共に歩むことです。信仰を持って神と共に歩むということは、神の子とせられた信仰と、復活させてもらうという望みを持って、「わが主イエスよ」と口に称えて、目の前に置かれた義務をなすことです。逃げたら駄目です。逃げた先でまた同じ問題を起こします。その置かれた場所で、いやなことを解決しなければなりません。宗教はそれを解決する力を持っています。

## キリスト教の原理に従えば、利益になる

兄弟達よ。私の言うことを聞いて欲しい。時は縮まっている。(コリント I 7・29)

ここで、「兄弟達よ。私の言うことを聞いて欲しい。時は縮まっている。」と広く一般の人々に対して話しています。また、35 節では、「わたしがこういうのは、あなた方の利益になると思うからであって、あなたがたを束縛するためではない。」と言っておりますが、この「利益になる」という字も注目すべき言葉であります。私どもは、信仰に入り、キリスト教の原理に従って生活をすることで損をすると思っております。そうではありません。本当にキリスト教の原理に従えば、利益になります。私も、銀行に務めておりましたから、損になることはしません。自分の損得勘定から言っても、キリスト教の信仰によって得になります。私は、この頃になって、それがはっきりして来ました。パウロは、正しい生活を送って、余念なく、一身に神に奉仕させたいために独身を勧めています。結婚生活によって妨げられて、奉仕も出来ない場合もありうるからです。この世は過ぎ行く。そのようなものにかじりついて生活すべきではないと言っているのです。

## 神とキリストに奉仕する精神をつらぬけ

泣く者は泣かない者のように、よろこぶ者は喜ばないもののように、買う者は持たないもののように、世と交渉のある者は、それに深入りしないようにすべきである。なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである。(コリント I 7・30、31)

これは一見、聖書の他の箇所、「喜ぶ者とともに喜び、泣く者と共に泣け」(ロマ書 12・15) とある内容と矛盾するよう見えます。しかしパウロが神に仕えようとする、彼の奉仕の極端なる一面として、この世のことを捨てる、という面がここに出ています。当時は、道徳的に極めて乱れておりましたが、それに対して、ストイック派のセネカのように、極めて道徳に厳しい一派がありました。そういう時代に生きる人々に対する警鐘の一つと考えられます。要するに、パウロの中心問題は、神とキリストに奉仕する精神を貫くということにあります。パウロは、エペソ書にあるように、キリスト教の家庭の素晴らしさは知っておりました。訪問して、家庭の麗しさを見ております。また、パウロの伝道に当たって、多くのキリスト者の家庭に世話になって来ました。それをよく知っているパウロがここで、このようなことを述べていることはよく考えなくてははいけないと思います。

## この世は過ぎ行くものである

パウロは、時は縮まっていると言っています。再臨が近いから、この世は過ぎ行くということをあまり強調したために、こういうことになったのだと、人は責めますけれども、私は、「この世は過ぎゆく」という原理は変わらないと思います。本当のキリスト者の安心や勇気と言うものは、「この世は過ぎゆくものである」というところから起こって来ます。特に、婦人にとっては、結婚問題が人生にとって最も重要なことでしょう。しかし、パウロにとって見れば、また、信者にとって見れば、結婚というものがすべてではありません。これがパウロの根本精神です。信者には、結婚しても結婚を通じてなすべき義務があるのです。そういうことがパウロの独身礼讃の根底をなしています。

## 妻の再婚

妻は、夫が活着ている間は、その夫とつながれている。夫が死ねば、望む人と結婚しても差支えないが、それは主にある者とに限る。しかし、私の意見では、そのままでいたら、もっと幸福である。わたしも神の霊を受けていると思う。(コリント I 7・39, 40)

私の考えでは、結婚問題は、男よりも女にとってより重要であるためと思われます。男は結婚しなくても生活できますが、女はある年齢に達すると結婚をした方が望ましいことになります。この世で結婚は男にとっても重要な問題ありますが、女にとっては最大の問題です。パウロは、この女にとって最大の問題を捨てよ、と言っているのであります。これは、キリスト教の根本的理論から出て来る問題です。キリスト教では、この世のすべてのものを捨てて神に従う決意があるか否かを問題にしています。人間の欲しがるすべてのものは、キリスト者にとってすべてのものではありません。ここがわからなければ、キリスト教は俗化してしまいます。キリスト教に力が無い理由はここから来ます。牧師が信者の顔色を見て、教会に来てくれ、献金してくれ、などと言うのは俗化した証拠です。この世の幸福を願うのは、キリスト教の目的ではありません。キリスト教の目的は永遠の生命を得ることにあります。この生命を得るために、結婚するもよし、しないもよし、最も大切なものが得られるようにこの世を過ごせ、と言っているのであります。

## 10年後の感想——結婚生活の賜物が多い

10年前に、結婚問題について、パウロと法然上人の考え方がよく似ていることを述べました。これは、パウロも法然も、我々が未来に受けるべき永遠の命、永遠不滅の賜物を見ておられるから、同じ考えが出て来るのであります。たびたび申し上げますが、カルビンがコリント前書の14章までは、第15章の復活論を書くために、準備的に書かれたものであると言いました。こと程左様に、ごたごたしたこの世の問題の解決を、復活の信仰から割り出しています。最後に復活のことを勉強しますが、本当に復活のことが分かって、これが我々の中心問題となった時に、我々は、真に、死に打ち勝つ事が出来、即ち、己に打ち勝つ力を持つことができます。私が知る範囲では、己に打ち克つ力を提供するものは、宗教だけです。この世においては宗教以外にはありません。我々は宗教によって、死に打ち克つ力と己に克つ力を学びつつあるのです。

独身生活については、独身の賜物を頂いている人は独身でいろと、また、その賜物を頂いていない者は、結婚せよ、とパウロは言っています。人類に対して大いなる貢献をした人には、独身であった者が多いことも事実です。私は結婚生活の賜物が欲しい。独身生活の賜物はいやです。その理由は、結婚生活の賜物が多い。独身生活の賜物は少ない。私は多い賜物が欲しい。私は凡人の賜物が欲しい。私は結婚して皆さんと一緒に多くの賜物を頂いて、皆さんと共に復活の信仰を学びたいと思います。